

苦悩の治癒

プンタ・デ・バカス、メンドサ州（アルゼンチン）

1969年5月4日

もし、今日ここで賢者の教えを請うだろうと思って来たのであれば、あなたは道を間違えている。なぜなら誠の知恵とは書物や演説で伝えられるものではないからだ。誠の知恵というものは、真実の愛が心の奥深くで見つかるのと同様に、あなたの意識の奥深くで見つかるものだからだ。

もしこの演説を聞くことで、後にこの男に対して反論できるだろうとか、あるいは誹謗者や偽善者にあおられてここに来たのなら、あなたは来た道を間違えている。なぜならば、この男はあなたから何かを要求するつもりもなく、あなたを利用するつもりもない。それはこの男があなたを全く必要としていないからだ。

あなたが耳を傾けているこの男は、宇宙の法則を知るわけでもなく、歴史の法則を知るわけでもない。そして世界の人々がどのような関係にあって統括されているのかにも無知な人間だ。都市とそれが放つ歪んだ野望から遠く離れたこの山脈の高台で、この男はあなたの良心に向かって話しかける。多くの都市では毎日が闘いであり、希望が死によって挫かれる。そして愛が憎しみに取って代わり、許すという行為が復習に転ずる。裕福な者と貧しい者とが入り混じるこの大都会に、そしてこの膨大な人類の平野に、苦しみと悲しみがのしかかっている。

痛みが体を襲う時、人は苦しむ。飢えが体を支配する時、人はまた苦しむ。しかし、直接的な体の痛みや飢えだけがあなたを苦しめるのではない。体を蝕む病、そして病がもたらす様々な影響もあなたを悩み苦しめるのである。

苦悩には2つの種類があることを理解してほしい。1つは病にかかった時の苦しみである。これは飢餓の問題が正義帝国の繁栄と共に後退できるはずなのと同様に、科学の発展に伴って後退する。

もう1つは病による身体の痛みなどとは別に、病がもたらす様々な問題に対しての苦しみである。目や耳、体に不自由があれば人はその困難に苦しむ。これは、身体そのもの、または病気にかかった体がもたらすものではあっても、それはあなたの意識の中に存在する苦悩だ。

科学の進歩をもっても、正義の進歩をもってもなくならない苦悩がある。それは意識の中にのみ存在するもので、信念、生きる喜び、愛情のもとに姿を消していく。この苦しみは、あなたの意識の中に存在する暴力にもとを正すということを理解しなくてはならない。

人間は所有しているものを失う事を恐れて悩み、既に失ったことに対して苦しみ、あ

るいは何かを手に入れようと必死になることで苦悩する。何かが不足する事に苦しみ、恐怖感を抱く事で苦しむ。

人類の最大の敵はここにある。病気への恐怖、貧困への恐怖、死への恐怖、孤独への恐怖。これらの恐怖感は全てあなたの意識が生む苦悩だ。そしてこれらは、あなたの心の奥深くに潜む暴力を暴くものである。暴力は常に欲望から派生することに注目したい。人が暴力的であればあるほど、その人の欲望は醜くあさましいものである。

ここで1つ、昔話をしよう。

ある時、長旅をしなければならない旅人がいた。旅人は四つ脚の動物に荷車を引かせて遠い目的地へと旅立った。この旅は時間制限のあるものだった。旅人は動物に「必然」という名をつけ、荷車を「欲望」、そのひとつの車輪を「快樂」、もう片方を「苦痛」と名付けた。常に目的地を目指しながら、我々が旅人は右へ左へと荷車を進めていった。「欲望」という名の荷車が先を急ぐほどに、それを支える車輪の「快樂」と「苦痛」も加速していった。

旅の道のりは長く、旅人は次第に退屈し始めてきたので、荷車を飾る事を思いつき、沢山の綺麗な飾りを荷車に付け始めた。しかし、この荷車の「欲望」に飾りを施せば施すほど、荷を引く「必然」に課せられる比重も増していった。その哀れな動物は曲がり角や登り坂では衰弱し、荷車の「欲望」をとうとう引けなくなってしまった。そして砂の道ににさしかかると、車輪の「快樂」と「苦悩」が大地に埋まり込んでしまった。

道のりはさらに長く、目的地は遥か彼方にあるなか、旅人はある日途方に暮れてしまった。その夜、彼はこの問題に対して、深く瞑想することにした。すると瞑想のさなかに、古い友、「必然」のいなく声を聞いた。その意味を理解すべく、翌朝早く起きて荷車の飾りを全て取り外し、荷を軽くした。そして目的地に向けて「必然」という名の動物に荷車を引かせつつ、急ぎ足で新たに旅立った。

しかし我々が旅人は既に多くの時間を失っていた。既に費やされた時間は取り戻せなかった。彼はまた次の日の晩に瞑想した。すると再び古い友からの声が彼を目覚めさせた。今度は、以前よりも更に困難をきたした。何故ならそれは「放棄する」という行為を意味するからであった。

彼は夜明けと共に荷車の「欲望」を手放した。それは車輪の「快樂」を失うことでもあり、同時にもうひとつの車輪「苦痛」を取り除くという事でもあった。荷車の「欲望」を捨て、「必然」という名の動物に跨り、旅人は行き先に辿りつくまで緑の草原を颯爽と駆け抜けていった。

欲望というものが、どこまで自分を追い詰めるかを見極めよう。そして欲望には質の異なるものがある。粗野な野望もあれば、もっと高揚されたものもある。欲望を高揚させよう、欲望を清めよう、そして欲望を克服しよう！これを実践する過程で、快樂の車輪は間違いなく犠牲となるが、同時に苦しみの車輪からも解放される。

欲望に触発され、暴力は病のごとく、その人の意識のみに留まることなく、その周囲の人々の世界にも侵食し、そして暴力は繰り返される。私の言う暴力は、人間同士が破壊を目的に行う武器をもっての争いだけを指しているわけではない。それは肉体的暴力のただ一つに過ぎない。

経済的暴力もある。経済的暴力とは人から搾取する行為で、他人から奪い、搾り取ることによって起こる暴力だ。そこには仲間意識や兄弟意識などなく、あたかも人間を獣の餌食としか見ない暴力である。

人種差別も暴力である。自分たちの人種と異なるということで、その人たちを迫害することは暴力ではないと思っているのか？人種が異なるという理由だけで、その人を中傷することは暴力を振るうことではないと思うのか？

宗教的暴力もある。人が自分と同じ宗教を持たないという理由で、職を拒んだり、その人たちへの扉を閉ざしたり、突き放したりすることは暴力を振るうことではないと思うのか？自分と異なる宗教観を持つからといって、嫌悪感を煽り、壁を作り、彼らを社会から迫害することは暴力ではないと信じているのか？同じ宗教を分かち合わないからと言って、家族や仲間から孤立させ、愛する者から引き裂くというのは暴力ではないのか？

そのほかにも、一定の風習や道徳を強いるという暴力もある。自分の生き方を人に強要したり、自分の使命を人に押し付けようとする事など、他の人が従うべき模範はあなただと、一体誰が言ったのだろうか？あなたの生き方があなたを幸せにするからという理由で、それを人に強いていいのだと誰に言われたのか？人にもものを押し付ける権利が自分にはあるという考え方はどこから来るのか？これもまた、暴力のひとつだ。

心の奥深くにある信念とそれに深く瞑想すること。これのみが世の中に自分自身と他人に存在する暴力、そして世の中に存在する暴力を消し去る唯一の方法である。他の出口はすべて偽りであり、この暴力から目を背けてはいけない。この世の中は暴力の終わりを見失い、今にも爆発寸前の状態だ。偽の扉を選んではいけない。狂ったような暴力的衝動を絶つことの出来る政治など存在しない。暴力を撲滅できる政党も社会運動もこの世には存在しない。世の中の暴力から目を背けさせるような、偽の扉を選択してはいけない。世界中の多くの若者が、この暴力と心の苦痛から逃れるために、偽の扉に向かってしていると聞いている。そして薬物に解決を見出していると。暴力を絶つには偽の扉を選んではいけない。

わが兄弟、姉妹よ、ここに転がるただの石ころや雪のように、そして我々を祝福してくれる何の変哲もないこの太陽の光のように、これらの素朴な掟を守ろう。自分の中に安らぎを見出し、それを他の人たちと分かち合おう。わが兄弟、姉妹よ、歴史を振り返ると、そこには人々の苦悩に打ち拉がれた姿がある。その苦悩する姿をしっかりと見据えよ...そして我々は前へ向かって進んでいくことを忘れてはならない。また微笑むということも学ばなければならない。更に愛するということを学ばなければならない。

わが兄弟、姉妹よ、あなたたち一人ひとりに、私は望みを投げかける。喜びへの希望、愛への希望。そしてまた身体の向上も必要である事を忘れないように、それらをもって心を高揚させて欲しい、そして精神を向上させて欲しい。